

業平と高子の悲恋

—後世物語との関連—

蔡 江華

キーワード 身分違い、まめ男、悲恋、業平、光源氏

はじめに

平安朝物語では様々の女性像が描かれている一方、女に恋する男性像も描かれ続けてきた。『竹取物語』の愚かしい求婚者達から理想の男性像光源氏が作り上げられるまでには長い時間が必要だった。「通う男に待つ女」という通い婚の時代には、女が男を拒否する権利しか持たないのと対照的に、自由に行動ができ、行動範囲も遥かに広い男が恋の主導権を握っている。しかし、このような優位にあるはずの男が、常に恋の勝利者とは限らない。

その内容の約三分の二が「男女の愛情」を扱っている『伊勢物語』^{*1}には、様々の恋の様相と情趣が描かれている。その中で、業平と目される「昔男」と、后がねの藤原高子との恋、伊勢斎宮恬子内親王との恋の物語は、何れも、男女二人が愛し合いながらも決別を迎える悲しい結末になっており、いわゆる悲恋物語である。この二つの悲恋物語は、後に、光源氏と藤壺との悲恋や朧月夜との関係を描く素材ともなった^{*2}。このように『伊勢物語』が後世物語に与えた影響については早くから注目されてきたが、とりわけ『源氏物語』は先行作品として『伊勢物語』を積極的に継承しており^{*3}、『伊勢物語』を踏まえた多くの場面の発想や叙述が見られることが指摘されてきた。

通い婚の時代に恋をし積極的に行動できるのは男である。業平は、後世に於いて光源氏と同様に「色好み」男と見なされ^{*4}、これまで多くの研究がこの「色好み」の視点から行なわれてきた^{*5}。しかし、『伊勢物語』の中心をなす業平の恋が既にこの物語の成立当初から人の心を打つ悲恋として語られていること、さらにこの悲恋を構成する要件に関しては、まだそれほど研究されていない。

業平と姫君高子との恋は、高子の入内を以て悲しい結末に終わるが、伊勢斎宮の場合^{*6}と異なり、とくに制度的禁忌を犯しているわけではない。行動的な男の恋はなぜ実らなかったのだろうか。ここでは男の悲恋に着目して『伊勢物語』の業平と高子の恋を考察する。さらにこの悲恋と後世の物語との関連を考

察することによって、『伊勢物語』の恋する男の原型としての意味を明らかにしたい。

第三段——身分違いの恋

高子入内前に、業平と高子が恋愛関係にあったかどうかについては三代実録などの公的記録にはまったく記されていないが、『伊勢物語』に記された二人の恋をめぐる話は、いかに物語化されていても、中核には史実を含んでいる*⁷。少なくとも当時の人々の間では、高子と業平の恋がよく知られていたことは疑い無い。

『伊勢物語』を在原業平の一代記として鑑賞することは早くも平安中期に現われていた*⁸。そして第三～六段は業平と深窓の姫君高子の恋をめぐるものとして読まれ続けてきた。これらの章段の内容から二人の恋の進展を知ることができる。すなわち、業平は東五条の西の対に住んでいた高子に思いを寄せ、恋歌を贈り（第三段）、ひそかに契りを結んだ。ひそかな関係であったから、業平は邸宅の門からではなく、築垣の崩れを越えて西の対に忍んで通った（第五段前半）。やがて二人の恋は主人（五条の後順子）の知るところとなり、番人を立てて業平の通いを阻止した（第五段後半）。その後高子が従姉妹明子のところ（宮中）に出仕し、業平は一人で旧地を訪れて悲嘆に耽り、「月やあらぬ」の歌を詠んだ（第四段）。思いに堪えられず、業平は彼女をこっそりと他所に連れ出した。しかし兄の国経と基経が、彼女を取り戻す（第六段）。その後、高子は清和天皇に入内したのであろう。

つまり、第三段→第五段→第四段→第六段という時間的な順序で二条の後の章段を一連の話として読むことができる*⁹。二人の恋の展開に沿って、この悲恋に至る要因を探ってみたい。

第三段で、業平に擬せられる男は、思いを寄せていた高子に「思ひあらば葎の宿に寝もしなんひじきものには袖をしつつも」という歌を詠みかけた。歌は、「私を思う心があなたにあるのなら、葎の宿だって共寝することができましよう。敷物とて満足にありませんが、そのかわりに私の袖を敷きながらでも」という内容である*¹⁰。

この歌は、『万葉集』の次の歌を念頭に詠んだものという従来の指摘がある。

玉敷ける家も何せむ八重葎おほへる小屋も妹とし居らば

卷十一・問答・二八二五

これは、自分の宿を「八重むぐら」と称している女の歌*¹¹に対する男の返歌な

ので、ここの「八重葎おほへる小屋」は疑いなく女の屋敷である。当時の「妻問い婚」という婚姻形態からも男が女の家を訪れることが想定されている。しかし、第三段の歌は、男から女への贈歌になっているので、「葎の宿」は明らかに女の宿ではない。が、男の家かどこかのあばら家と理解すると、当時の通い婚という婚姻形態に合わないことになる。歌の内容をどう理解すべきかは、従来難しいとされる。

万葉の歌で「葎の宿」と対照的に用いられる言葉は、「玉敷ける家」、いわゆる「玉の台」であることを見逃してはいけない。すなわち、『万葉集』では、「八重葎」や「葎生」がその家の貧しく汚いことを形容するのに用いられることに対して、「玉の台」がその反対語として使われる。万葉の後、やがて「八重葎茂れる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり」（拾遺・秋・一四〇・恵慶法師）のように、没落、荒廃して人の寄り付かなくなった家の寂しさを「葎の宿」のような言葉に託して詠むのが一般的となった。

従って、この二語の対応関係から考えると、第三段の歌にいう「葎の宿に寝もしなん」は、女が「葎の宿」ではなく、「玉の台」に住む人であることを暗にはのめかしていると解釈できよう。つまり、女は高貴な女性であり、簡単に手に入れることの出来ない存在なのである。

段の最後に、女が後に二条の後になった、藤原高子であることが明記されている。高子^{*12}は、閑院左大臣冬嗣の孫で、長良の娘である。実兄基経は男子が恵まれなかった叔父の摂政良房の養子となった。良房は清和天皇が幼少のため、天皇の外祖父を以て初めての人臣としての摂政となった。しかし、天皇が成人し妃を迎えて皇子でも生まれたならばどうなるだろうか。良房は、清和天皇の母・文徳天皇の妃になった娘以外に娘がなく清和天皇の妃を差し出すことができない。その上、権勢をめぐって常に競い合っていた弟の良相には、文徳天皇の妃になった多賀幾子のほかに、娘多美子がいた。つまり良相と張り合うには、父に死なれた^{*13}、養子基経の姉妹である未婚の高子を清和天皇の女御とすることが、良房にとって最良の選択であり、また最後の手段であったろう。高子は、良房が自分の権勢を維持するための唯一の持駒であり、良房―基経にとって至宝の存在である。すなわち、女は今時の権力者のかきずく「后がね」の娘であり、まさに「玉の台」に住む深窓の姫君だった。

二人の出会いはおそらく、高子が十八歳で五節の舞姫として十歳の幼帝の前に現われた時^{*14}であろう。三十五歳の業平は殿上で奉仕する五位の藏人であった。嵯峨・仁明天皇時代には、諸家が挙って五節の舞姫を貢進してきたし、また九世紀初頭には選進された五節の舞姫たちが天皇の寝燕に侍る慣行が確実に成立していた^{*15}。まだ元服していない清和天皇の寝所に高子そのまま侍らさ

れたとは考えられないが、天皇が元服後宮中に宮仕えさせようという良房の企みは充分考えられる。事実、高子は後の貞観八年（八六六年）二十五歳で清和天皇の女御となったのである。業平はこのような五節の舞姫の政治的な位置と良房の実状を熟知していたはずである。

業平は高貴な宮家の出身であるが政治的権力をもたない中流の貴族にすぎない。彼は二十二歳の時蔵人になり、二十五歳に従五位下に叙されて以来、官位の昇進が止まっていた。やっと従五位上に叙された時には、すでに三十八歳になっていた。権勢の中心である華やかな女の家門に対して、男の方は権勢の中心から疎外されて没落しつつある境遇にある。

以上見てきた通り、摂関政治下の二人には明らかな身分の違いが存在する。従って、男は万葉集の古歌を借りて、「昔の人は、思いがあれば、葎の宿でも共寝するが、あなたはそうに私のことを思っているのでしょうか。私は勿論そうです。」と、女へ自分の恋心を訴えると同時に、女の心を確かめようとしたのである。歌の中の「葎の宿」は、男の住むところを直接指しているわけではないが、女の「玉の台」と対照的に自分の状況を「葎の宿」に込めて詠んでいると理解してもよいだろう。

後世の物語にもこのような身分違いの恋が描かれている。自分より身分の高い女に求婚する男は、後世の『うつほ物語』のあて宮、『源氏物語』の玉鬘、女三の宮などの求婚譚にしばしば登場する。あて宮をめぐっては、東宮を始として、親王、参議、文章博士、さらに僧までなどの各階層を代表する求婚者たちがいる。その中で、行正・仲頼・忠こそ・藤英ら四人は、あて宮から一度も返歌を得ていないにも関わらず、終始東宮以下の求婚者たちとともにあて宮に歌を贈り続けているが、摂関家的な政治の論理によって秩序づけられた貴族社会の中では、はじめから求婚を拒否されている立場にいる^{*16}。あて宮との間には身分差という溝があったからである。あて宮が歌を返さないのもよほどのことがないかぎり、この身分差が意識されていたからだろう。

また、『伊勢物語』に先行する『竹取物語』では、かぐや姫をめぐって、求婚者の五貴人が相次いで登場するが、何れも難題を解けず求婚は失敗に終わる。とうとう地上で身分の最も高い帝も、月の都に属するかぐや姫を手に入れることができなかった。帝の求婚の失敗は仙界に属するかぐや姫が人間界の人々より身分が高いことに起因すると考えることができるだろう。

『伊勢物語』の後段では、男は手の届かない高貴な女性を「月の桂」と称し（七十三段）、思慕し（八十九段）、恋しくて女の所へ来てみるが、恋の便りすら許されぬままに帰って行く（九十二段）。「臥して思ひ、起きて思ひ、思わびて」歌を詠む。

あふなあふな思ひはすべしなぞへなく高きいやしき苦しかりけり

(九十三段)

身分違いの叶わぬ恋は、「昔も、かかることは世のことはりにやありけん」(九十三段)と評されている。

すなわち、高貴な女性への思慕は古来から存在したが、身分の違いという越え難い障碍があるため、男の恋はなかなか思ったとおりに叶わないのである。

『伊勢物語』の第三段もこの系譜にある。男の恋は、はじめから成就する可能性が殆どない。男はそれを自覚している。これは、第四段の「本意にはあらで」という言葉からも窺える。それでも、男は恋の歌を詠み、女の気持を引こうとしている。歌に込められる男の尋常でないほど深い思いは、後に尋常でない行動を引き起こすことになる。越え難い障碍のある恋を成就するには非常手段に訴えるしかないからである。

第五段——「まめ男」

第五段は男の忍び通いの様子に焦点を当てて描かれる。これと対照的に、女側からは歌もなく、その言動は殆ど述べられていない。しかし、「人知れぬ我が通ひ路の関守はよひよひごとにうちも寝ななん」という男の歌に対して、女が「いといたう心やみける」とわずかに記述することにより女の心の痛みが表されている。それと同時に、女が男のはげしい恋に応えたことも暗示されるのである。男の恋は決して一方的なものではなく、二人は相思相愛の間柄である。第三段の歌は男への女の思いも前提としている。女の所へ通うことができたのは、女の「思ひ」があったからである。

身分が違って男が女の心を掴むことができたという点で『竹取物語』の求婚者との大きな違いが見られる。五貴人はもとより、帝の入内の要請に対してもかぐや姫は固く拒否する。帝はかぐや姫と文を通わすようにはなったが、恋仲になってはいなかった。『うつは物語』の求婚者には贈歌のない人もいるし、歌を贈っても返事すら貰えない人もいる。東宮を除いてはたとえ返歌を貰ったとしてもあて宮と恋仲に発展することはない。しかし、『伊勢物語』では二人が愛し合う間柄に発展するのである。

しかし、女の承諾を得たとはいえ、男は堂々と門から入ることができず、「築地のくづれより」度重ねて忍んでいく。男の忍び通いは、女の親族が婿取りの儀式を挙げておらず、男と女の関係がまだ公に認められていないことを表している。通い婚では、結婚は当人同士の合意だけで成立する場合もあれば、家同

士の話し合いで結婚を決める場合もある。とくに上流貴族の結婚は個人の問題であるよりは、はるかに重く家の問題である。「結婚は、男女の出会い→当事者の合意（契約の成立）→婚礼（家族の承認）→披露（世間への告知）」という段階を経て進行するが、家どうしの話し合いによる結婚は実質的に『家族の承認』が結婚しようとする『当事者の合意』に先立っており、それを形式化してしまう¹⁷。だから、二人の関係がついに女の親族に知られてしまった時に、家の主は「関守」を設けて男の通いを防ぎ、男を婿にするつもりのないことをはっきりと示したのである。ここで「関守」として女を警護した「兄人たち」に注意を払っておきたい。彼らは第六段で大きな役割を果たすことになる。

権門の姫君が親族の権力の道具に使われるというのは、当時においてごく一般的なことだった。しかし叶わぬ恋と分かっているながら積極的に行動する男の一途さと真情は女の棲家の「主」までを感動させて、つい男の通いが許されることになる。

このような男の真情は、高子との恋が語られる前段、第二段の歌に既に詠まれている。西の京「世人にはまさ」る、しかも「かたちより心はなんまさりたりける」女がいる。一人ではない様子にも関わらず「かのみめ男」は女と「物語らひて」情を交わし、その後思いに乱れて弥生の雨に託し次の歌を贈った。

起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ
人妻との叶わぬ恋を絶ちきれない男は、ここで「まめ男」と呼ばれている。

今西氏は、この「かたちより心」という言葉に注目し、「まめ」とは、「かたち」においてよりも一層「心」において女に出会おうとする誠実の謂であり、「まめ」こそ「色好み」ならぬ男の本質である¹⁸と指摘した。しかし、第二段「かたちより心なんまさりたりける」女には、「西の京」、「世人にはまさりけり」、「ひとりのみもあらざりけらし」という言葉が施されている。「西の京」は、周知のとおり東の京にくらべてさびれており、都の中心を離れた所である。つまり西の京に住むとは、さほど身分が高くない、または没落貴族である女の身分を暗示している。女は世間一般の人よりはましであるが、とびきり勝れているわけでもない。そして「まめ男」のほかに男を通わせていたらしく、人妻のように思われる。総じて言えば、この女は、噂を立てられるほど身分や容貌などが優れているわけではない人妻である。しかし、男は、「かたちより心」に引かれ、人妻という禁忌も憚らず、果たされぬ恋と分かっているながら、ただ女への恋情を訴え、一途に思い続けるのである。第二段では、このような男を「まめ男」と呼んでいると思われる。

伊勢物語の生成研究では、片桐洋一氏の三段階成立説が有力で、この第二段は、古今集以前に存在した原型伊勢物語の一部をなしていたと推定される。一

次的な伊勢物語^{*19}には「男」を「色好み」ならぬ「まめ」な人物として把握するという視点が、物語の始めから備わっていた^{*20}。恋における「まめ男」であるからこそ、第三段と第五段の男は、身分違いという障碍が存在しても、高貴な女性を一途に思慕するのである。男の歌には男自身の心中に住して思い悩み尽くすところの内面心理^{*21}が込められており、そこに恋に対する男の一途さと感傷が読み取れる。

第四段——「心ざし深かりける」男

五条の後、藤原順子^{*22}の邸の西の対に住む人は、順子の姪に当る高子、後の二条の後と目される。第五段では、男が懸命に恋を訴え続けた結果、順子の暗黙の許しを得て、男は高子のところへ通うようになった。

順子は、おそらく良房の依頼で高子を預かっていた。順子には、良房の意図が分かっていたに違いない。だから、「関守」を置いて高子を守らせたのである。しかし、良房も良相も順子の同母兄弟であり、どちらが権力の頂点に立っても彼女の地位は動じない。順子は必ずしも良房の行動に同調しなければならないわけではない。しかも順子は良房より良相のほうを親密に思っていたようである^{*23}。また、世間から見れば、業平は在原の姓を賜ったとはいえ、父母は歴々たる王氏であり、高子にとって、門地的にはふさわしくなくはない出自ではあった。業平の深い真情を知るに及んで、順子は高子に同情し、その通いを無言のうちに許したのであろう。

この設定は、『源氏物語』に登場する雲井雁と夕霧の祖母大宮を連想させる。雲井雁を東宮に入内させようとする内大臣は、夕霧との恋が許せないが、二人を愛育してきた祖母大宮は、息子内大臣の意志を無視して二人の恋を許した。しかし、雲井雁の後見人である父内大臣が認めなければ、二人は到底結婚することができない。父内大臣は大宮の放任主義を恨み、とうとう雲井雁を自邸に引き取って夕霧との恋仲を引き裂いたのである。

高子と業平の場合も、順子は大宮のように決定権を持っていない。高子の後見人はあくまで基経—良房である。ほかに入内させるにふさわしい娘を持っていれば、良房は断固反対することはなかったかもしれない。しかし、良房の権勢の運命は唯一の持ち駒である高子にかかっていたので、二人の恋を思うままに発展させるわけにはいかなかった。そこで良房は急遽高子を順子の邸から連れ去ることにした。これが、第四段のはじめで男の通っていた女が急に姿を隠した真相であらう。

良房は高子を「人の行き通ふべき所」ではない所、つまり宮中に入れた。入内と解釈することもできるが、第六段をあわせて考えてみると、従姉妹の染殿女御明子のところに出仕させた²⁴と考えることもできよう。今までは人目を忍ばなくてはならなくとも通うことはできた。しかし、女が別世界の人となり、男はもはや会うことすらできなくなった。

悲嘆に暮れた男は、女がいなくなった、がらんとした故地の西の対を訪れた。そして、女への思いに浸り、「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」と詠んで泣きながら帰った。「や」を疑問ととるか反語ととるかによって歌の解釈は異なってくるが、歌の核心をなす男の哀れな真情に変わりはない。逢うことのできないまま一年過ぎても女への思いが変らず、思い出の場所を訪れて女の面影を偲び、春の夜を泣き明かす男の心には、恋に対する一途さと感傷しかない。引き離されても純情に失った恋を嘆き続ける男は、「心ざし深かりける」男と言われている。ここには、第三段と第五段に描かれる「まめ男」と共通するものがある。

「心ざし深かりける」男は、後世の物語にも少なくない。『うつほ物語』のあて宮求婚譚で、最初に登場するのは実忠である。あて宮に懸想し、彼女の「父おとどに聞え給ふとも許され給ふまじく」と知りながら、季節の折々に歌を贈り続ける。実忠は総勢十六人の求婚者の中で最も熱心に求婚した人物で、東宮が登場するまで第一人者として扱われた。あて宮の東宮入内の日に、実忠は「絶入り給」うほどだった。彼とは対照的に、源氏の中将、頭の中将などは「いみじう悲しと思しながら『世中ははかなきものなり。かく参り給ひぬとも、かぎりとは思はじ』と心強う思ひて、御送りもせむと思ひていましたり」とあり、嘆きはするが、思い切りも早い。実忠はその後、「宮仕えもせで、ただつれづれとありふれど、悲しくおぼゆれば」、隠遁の小野よりあて宮へ

かくばかり消ゆる我が身に年を経て燃ゆる思の絶えずもあるかな
と恋着の歌を贈っている。

摂関政治に置かれる貴族男女は、その制度の枠組みの中でしか生きられない。権門の后がね娘と分かっているなら、大抵の貴族男はその氣勢に圧されて手を出さず、または「源氏の中将、頭の中将」のように求婚の失敗をあっさり諦めて新しい恋の相手を探すだろう。しかし、「まめ」男は違う。初めから成就しえない恋とわかっていながら積極的に行動し、たとえ障害があっても恋に一途に生き、恋が阻害され女が引き離された後も、女への思いが日ごとに増し悲嘆に暮れる。心ざしの深いことも、「まめ」男の一つの要素である。この「心ざし」の深さにおいて伊勢の第三、四、五段の男と実忠は相通ずるものを持っている。そしてこのような「まめ」な男であるからこそ、初めて高子との悲恋が

生じ得たと言えよう。

因みに、『伊勢物語』にはもう一人の男が描かれている。「若きおとこ、異しうはあらぬ女を思ひけり」で始まる第四十段である。しかし、女が卑しい身分である為、男の「さかしらする親」は女を追い出し、二人を引離した。男は悲嘆のあまり気絶してしまった。最後に、作者は「昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。今の翁、まさにしなむや」と評して段を結ぶ。

貴族の男性が家に仕える女性に情をかけることはありふれたことであり、当時の社会では十分許容され得ただろう。しかし、男の恋は「さかしらする親」の干渉によって遂げられなかった。親の干渉ができたのは、男が「人の子なれば、まだ心いきおひ」がなかったからである。男女の恋愛関係は、親族の権力利害関係にとくに関わっていなければ、基本的に本人同士の同意があれば成立するものである。しかも、このような女性は所詮使用人であり、妻として社会的に公認されることはない。この社会通念は「さかしらする親」はもとより、女も「若きおとこ」も当然分かっているはずである。たとえ男が自分の強い意志を押し通したとしても、二人は到底男主人と女召使の身分差を超えることができない。

それにもかかわらず男の両親がわざわざこの女を追い出したのは、男の一途さに常軌を逸したのを見てとったからだろう。しかし男の思いは親の想像をはるかに超えていた。男は「血の涙」を流し、悲嘆のどん底に陥り、そのあげくに、「真実に絶え入り」そうになった。このような男の行動は、前述した各章段の男と共通するものばかりで、この男も「まめ男」と言えるだろう。命がけで遂げられぬ恋を悲しむ男の悲嘆ぶりに、親は「猶思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじ」、驚きあきれるばかりだった。

「若い男」は思慕した結果をあらかじめ意識せずに、ひたすら女へ心をはたらかせて、命にかえてもという純情な若者であった。「さるすける物思ひ」とは、単に恋に熱中して思い悩むだけではなく、この若者のように、分別なく限りなく恋に生きようとする若者の恋である。

このような若い「まめ男」は、後世の物語にあまり見出せない。高子との恋に我を失った業平も、若い盛りをとうに越えていた。後世に見られる「まめ」男の典型はむしろこちらの方である。『源氏物語』に「まめ人」の代表として登場するのは夕霧である。

まめ人の名をとりてさかしがりたまふ大将、この一条宮の御ありさまをなほあらまほしと心にとどめて、おほかたの人目には昔を忘れぬ用意に見せつつ、いとねむごろにとぶらひきこえたまふ。下の心には、かくてはやむまじくなむ月日にそへて思ひまさりたまひける。

(夕霧巻)

生真面目な夕霧は、友人柏木の未亡人である落葉の宮を面倒見るうちに恋心を抱くようになった。落葉の宮に拒まれても「深き心ざしを見えたてまつりて、うちとけたまふをりもあらじやは」と思って恋を訴え続け、まるで若者のように恋に夢中になった。夕霧はこの時既に29歳で何人かの子供を持つ中年男である。「いとおとなしうよろづを思ひしづめ、人の謗りどころなく、めやすくて過ぐし」てきた夕霧は、落葉の宮との恋に気の狂ったような行動に出てまるで分別を失ってしまう。雲井雁との切ない恋に苦しみ、何もできず涙を流すだけだった若い頃の夕霧の面影は完全に覆される。父の光源氏は、この夕霧の色恋沙汰を「のがれわびぬる」「宿世」に帰するほかなかった。中年と言えども、夕霧の分別なく恋にはしるところは『伊勢物語』の若者と同様である。あだことと無縁に見えた「まめ人」の夕霧は、恋においてもやはり「まめ男」である。

まめ男であるからこそ、その恋に対する一途さと情熱は時には狂気を感じさせるほど常軌を逸したものになる。『伊勢物語』の三、四、五段に男の並大抵でない深い思いは、女との別れを拒んだとき、後の第六段で描かれるような尋常でない行動を取らせることになる。

第六段——盗み

とても手に入れることのできない女に言い寄り続けてきた男は、その末に女を「からうじて盗み出」る。しかし、せっかく盗みだした女はたちまち鬼に食べられてしまう。人間の力は到底鬼に勝つことができない。第六段の前半では、当時よく知られていた鬼の伝承^{*25}を用いて男と女の悲劇的な別れが描かれている。

この「鬼一口」話の後に後人が書いた注が附される。注記は、史実を述べるような口調で書かれている。染殿女御明子のところに出仕している高子の美貌に見惚れて、業平と擬される男が、彼女を宮中から盗み出たところ、ちょうど参内する途中の高子の兄達に気付かれ、女が連れ戻されてしまった。段の最後に、高子がまだ入内していない時のことと記されている。これは、「注を書いた後人個人の、この段の見方を書いたものではなく、当時の人々の、この段の見方を含んでいるというふうにも理解することが出来る」^{*26}。業平と高子との恋は、伊勢斎宮の場合と違って、当時の人々の考える社会的禁忌を犯していたわけではないことが、ここからも推測されるだろう。

「女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりける」という詞には、男の一筋と心ざしの深さが窺える。これは、前三段と共通するものである。しか

し、男がいくら通い続けても、女が摂関家の「后がね」娘である以上、二人の恋は叶うはずがない。そこで女への尋常ではない思いは、男を常軌を逸する強引な手段に訴えさせたのである。つまり「盗み」である。

高群逸枝氏は、婿取婚が行なわれる平安期には例外婚として「スエ」という婚姻形式が見られると指摘している²⁷。婿を自家に通い住まわせるのに対して、女を自家につれこんで同居する婚姻形式は、「スエ」である。色好みの貴公子が貧女や孤女をスエることが多いが、「逆に男よりも高い身分の女を『ぬすみスエ』ることもあった。物語では『伊勢』、『大和』にそれがみられ、史実では小野宮実資（『小右記』）や源俊房（『水左記』）にそれがみられた」と述べている。

『平中物語』にも身分の高い女への平中の恋が見られる。平中は一時女と文を通わす仲になりはしたが、周りの疑いが生じたために女は返歌ができなくなった。平中は「われより高かりけるよ、なににかはすべき」と思い、淡々と「思ひやみ」、盗もうとは思わなかった。この恋の話は逆に、男が女を盗み出し大事に世話するという例外的な婚姻が、女への並外れて強い思いを前提とするものであることを物語っている。

『うつほ物語』のあて宮求婚譚でも、あて宮略取事件が語られる。求婚者の一人、上野宮は、あて宮への思いが叶うように様々の人に相談し、仏法に通じる大徳や学問に長ける大学の衆などの提案を聞き入れ試してみたが、うまくいかない。そこで最後に博打の提案を聞き入れあて宮を略取した。盗み出したのは、あて宮の父左大將が仕立てた偽あて宮であった。上野宮は結果的に本物のあて宮を手に入れることは出来なかったが、正常の求婚で成婚の見込みがない場合は、最終手段として略取するほかなかったことが分かる。

光源氏もまた、若紫の祖母に若紫を父代わりに養育したいと何度も話を持ちかけたが、最終的には「盗み」の手段を取った。略取は当然誰でも安易に行なえたわけではない。光源氏の場合は身分的な障碍がなかったために見事に成功したが、身分の高い女性の場合、盗みは容易ではなく、上野宮のように失敗することが多かっただろう。『伊勢物語』の第十二段も、失敗に終わった男の盗みが語られている。

女の所へ通い続け恋を訴え続けてきたが、到底女の親族に受け入れられない現実直面したこの段の男も、危険を冒して盗みの行動に出たのである。盗みが一旦失敗すれば、二度と女に会えないことを、男は無論知っている。この無謀な行動は、やはり権勢の前で無力に終わった。好きな人を自分から引き離れた「兄たち」は、男にとって鬼である。女との生涯の別れは、鬼に食われて亡くなったのと同然だった。残された男は、ただただ悲しむしかできない。作者

は、二条後の物語の系列に鬼の伝承を織り込むことによって、この悲恋にこの世ならぬ緊迫感を与え、悲劇的な陰影を際立たせることができたのである。

まとめ

以上、『伊勢物語』の第三～六段に語られる業平と高子との恋を中心に考察を行ってきた。一方は没落貴族の男で、他方は権力者の后がねの娘である。高貴な女に対し男は身分が及ばない。身分差を前にして男は、終始女への深い心ざしを貫き、恋を成就するために常人の考えられない行動を取る。ここには不可能と知りながら、不可能な恋に挑み、懸命に恋する「まめ男」像が浮き彫りにされている。

一方、恋が妨げられた男の尋常でない物思い、男性の積極的な言動と対照的に、女性の方は歌もなく殆ど何の行動も見せない。その存在はまるでヴェールに包まれているようである。それがゆえに、恋に一途で純情な男性像がより一層引き立てられる。とはいえ、ここでの男の恋は決して一方的なものではない。言葉の端から二人が深く愛し合っていることは確認できる。

摂関政治の身分序列社会に生きる二人には身分違いの恋は許されない。他の例にも見たように、身分差は悲恋を生み出す重要な要件である。しかし、業平と高子の恋を真の悲恋と感じさせるのは、何と言っても業平が示す「まめ」男ぶりである。つまり、彼らの悲恋は、身分差という制度的要件と主人公の「まめ」男ぶり＝心的要件の二つから成り立っているのである。

周知の通り、この悲恋は光源氏と朧月夜との関係を描く素材となっている²⁸。既に指摘されているように、光源氏と朧月夜が置かれた社会的立場や政治状況、そして二人の逢瀬が右大臣に見つけられる場面などにおいて『伊勢物語』を踏まえた形跡が見られる。両者の間にそれ以上の関係を存在するかどうかは恋の当事者の心理に立ち入って考えてみる必要があるだろう。

光源氏が忍び込んで来た時、朧月夜は「この君なりけりと聞き定めて、いささか慰め」るが、その後、「はかなかりし夢を思い出でて、いとの嘆かしうながめたまふ。春宮には、四月ばかりと思し定めたれば、いとわりなう思し乱れたる」とあって、彼女の方が一家の敵に近い光源氏への恋に執着している。

一方、一夜明けた後の光源氏は、「まだ世に馴れぬは五六の君」より結婚している妹たちのほうが「いますこしをかしからまし」、また六の君だったら「いとほしうもあるべいかな」と思い、更に藤壺の「こよなう奥まりたる」気風と思ひ比べる。また、右大臣の何れの娘かを「知らであらむ、はた、いと口惜しか

るべければ」と思うが、「尋ねたまはむにあとはかなくはあらねど」、「ことにゆるしたまはぬあたりにかかづらはむも人わるく思ひわづらひ」、積極的に朧月夜の素姓を探ろうとしない。そもそも朧月夜との関係の発端は光源氏の藤壺への果たせない思いからであって、彼女が東宮に参内することに口惜しさは示すものの、業平のような一途さが全く見られない。つまり、光源氏は、彼女を「おしなべてのさま」と思っていなかったのである。しかし、敵対権勢の家筋の娘で、しかも東宮への宮仕えが予定されていることを知っていながらも光源氏は憚らず積極的な行動を取る。ここに確かに業平との共通点が見られるが、これは『源氏物語』では「例の御癖」と距離をとって語られるだけである。

二人の関係は、朧月夜にとっては悲しい片恋になるが、光源氏にとっては単なる一時的な「慰め」だったろう。二人は明らかに業平と高子のような愛し合う間柄ではない。二人の仲は朧月夜の親族の反対によって裂かれたが、光源氏に彼女への純情さや一途さが欠けているため、二人の間には、『伊勢物語』のような悲恋が到底生まれえなかった。光源氏の悲恋は、一途な思いを寄せる藤壺との恋にしかより見出されない。この問題については今後の課題として考察することにしたい。

付記：『伊勢物語』、『源氏物語』、『平中物語』、『宇津保物語』の本文は、『新日本古典文学大系』（岩波書店）による。

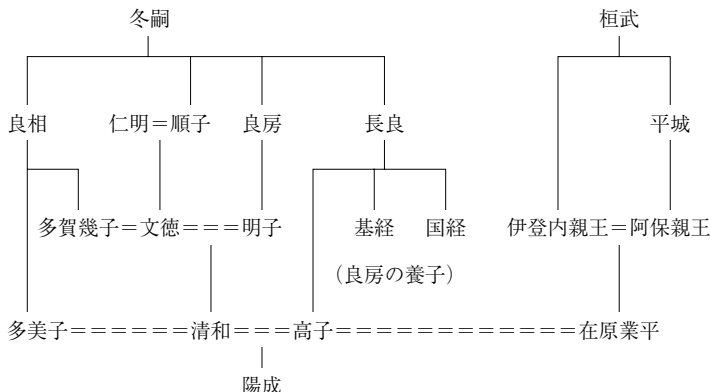
注

- * 1 森本茂 『伊勢物語全釈』（大学堂書店、昭和48年7月）
- * 2 石川徹 『古代小説史稿——源氏物語と其前後——』（刀江書院、昭和33年5月）
- * 3 石川徹氏は、『古代小説史稿——王朝小説の変貌と源氏物語の位相——』（同注2）の中では、「伊勢物語は源氏物語には深い影響を与えていると思われるが、すぐ次期の作品、宇津保、落窪には、殆ど影響らしい影響を与えていないのである」と述べている。
- * 4 『和歌知頭集』には、「鳥そもそもまづこのものがたりは、いかなりける人の、なに事を詮としてかきたりけるものぞ。風ことあたらしくとひ給ふものかな。平城天皇の御まご四品阿保親王の五郎の御子、あめのしたのいろごのみ在五中将業平朝臣、自ふるまひたりし事をむねとして、ふるきもの

がたりをまじへてかきおきたりし物語也。」とある。(片桐洋一『伊勢物語の研究』資料編所収、明治書院、1968年2月～1969年1月)

- *5 今井源衛氏の「色好みの特質と変容」(『国文学 解釈と教材の研究』26巻5号、1981年4月)、鈴木日出男氏の「いろごのみ―業平から光源氏へ」(『国文学 解釈と教材の研究』28巻9号、1983年7月)などがある。
- *6 神に仕える未婚の内親王を犯すことは、神権への禁忌を犯すもので根本から禁じられているため、伊勢斎宮との恋は、はじめから成就しえないことが予定されている。この悲恋については、稿を改めて考察することにした。
- *7 角田文衛氏は『王朝の映像』(東京堂出版、昭和45年)において、文学資料と史料とをあわせて分析することによって二人の事実関係を立証している。
- *8 『伊勢物語』が『在五が物語』(『源氏物語』)・『在中将』(『更級日記』)・『在五中将の日記』(『狭衣物語』)などと呼ばれたことから窺わせる。
- *9 妹尾好信氏は、『伊勢物語』の形成過程と段末注記(『平安文学論究』第十四輯所収、平安文学論究会編、風間書房、平成11年10月)で段末注記から第五段・第四段・第六段という順序の読み方の仮説を提示したが、筆者は第三段も入れて本文を分析する。
- *10 折口信夫氏は『ノート編第13巻・伊勢物語』で、この歌が内容的にみて女の歌であり、内容が素朴で、古代生活にもとづく作であると述べている。
(『折口信夫全集』に所収。中央公論社、折口博士記念古代研究所編纂、1970年)
- *11 思ふ人來むと知りせば八重むぐら覆へる庭に玉敷かましを 卷十一・問答・2824

*12



- *13 高子の父長良は従二位権中納言兼左衛門督で、斉衡三年（八五六年）五十五歳で没している。『文徳天皇実録』 斉衡三年七月三日条。
- *14 『三代実録』 貞観元年（八五九年）十一月二十日条。
- *15 服藤早苗 「五節舞姫の成立と変容——王権と性をめぐって——」（『歴史学研究』 667号、歴史学研究会、青木書店、1995年 1 月）
- *16 室城秀之 「拒否される求婚者たち<行正・仲頼・忠こそ・藤英をめぐって>——うつほ物語の表現と論理——」（『日本文学』 30巻 2 号、日本文学協会編、未来社、1981年 2 月）
- *17 西村亨 『王朝びとの恋』（大修館書店、2003年 9 月）
- *18 今西祐一郎 『『色好み』私論』（『静岡女子大学国文学研究』 第 8 号、1975年 2 月）
- *19 片桐洋一氏の三段階成立説によれば、第一次は業平の歌を中核としながら匿名の<男>の事蹟として語られたもの、古今集にも素材を提供したものである。
- *20 注18に同じ。
- *21 青木生子 『日本古代文芸における恋愛』（清水弘文堂書房、昭和44年 1 月）
- *22 良房との説もあるが、ここでは順子と取る。
- *23 『三代実録』 貞観元年四月十八日条
- *24 由良琢郎 『伊勢物語講説』 上巻（明治書院、昭和60年 6 月）
- *25 女が鬼に食い殺される話が、『三代実録』、『扶桑略記』、『今昔物語集』、『古今著聞集』などに伝えられている。
- *26 注24に同じ。
- *27 高群逸枝 『日本婚姻史』（至文堂、1963年 5 月）
- *28 注 2 に同じ。

